
白黒と低音のセカイ

利木 糸会

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白黒と低音のセカイ

【Nコード】

N5871I

【作者名】

利木 糸会

【あらすじ】

様々な特権を持ち「神」と畏れられる役人が、五つの「セカイ」を支配する世界。中央への勤務辞令を受けた彩羽は、花売りの金糸雀と共に東方を旅立つ。

金糸雀へ伝えていく、役人だけが知る「知識」。旅の途中に触れる、見たことのない素晴らしい世界。その先にある目的の地、中央セカイで彩羽を待つものとは――。

01「異動辞令」（前書き）

他の作者さんに比べて、一話ずつが長くなってしまいかもしれません。

また、改行があまり好きではないので、ごちゃごちゃして読みにくい部分もあるかもしれません。ご了承ください（――）＜

01「異動辞令」

終わりが来た。

その日最後の書類を片付け終わると、所長から呼び出しが掛かった。

無駄に大きくて重い、檜の木の扉。

精々涼しい顔をしてそれを開けると、これまた無駄に大きい机の向こうにふんぞり返るオッサンがいた。呼び出したのだからこっちを向いておけばいいのに、わざわざ背を向けて窓の外をご覧になっていた。恐らく威厳を出しているつもりなのだろうが、薄くなった頭頂部が笑いと哀愁を誘っている。

仕事もろくにできないくせして、そういう無駄な演出ばかりするから部下に嫌われるんだよ。

所長が無駄をする度、奴の髪が一本抜けていく。彼の下で働く人間たちの間では、まことしやかにそんな噂が流れていた。

噂というか、ほぼ願望だ。日に日に薄くなる所長の髪を見て、ほくそ笑むのが所員に与えられた癒しだった。さつさとハゲる。

「知識部古書保存課所属、西條彩羽さいじょうあやはです。お呼びでしょうか」

諸々の不満を押し殺して、俺は恭しく頭を下げる。

「御苦労」

椅子が軋む音と共に、無駄に重厚感を醸し出そうとする声が響いた。よし、一本抜けた。

顔を上げると、机の上に封筒が載っていた。役所で使われる、伝達事項用の茶色い封筒。宛名は俺だった。くそ、通信部のヤツ、直接本人に持って来いよ。

「君宛だ」

見りゃわかるつての。無駄な確認、マイナス一本。

「ありがとうございます」

俺が封筒を手元に引き寄せるのと同時に、所長の濃い毛をあしらった太い指がそれを制した。反射的に睨みつけそうになるのを慌ててこらえる。試しに軽く引いてみたが、彼の指には相当力が込められているらしく少しも動かなかった。

「中央人事部からの書類だ。ここで読み上げてもらおうか」

人事部からの言い渡しは、通常所長をはじめとする上の人間から伝えられる。

つまり、今回俺に言い渡された辞令は常ならざるものというわけで、所長サマとしては気にせずにはいられないのだろう。お前何かやらかしたのか、と。

軽くうなずいてやると、ようやく彼は手を放した。筆立てにさしであるペーパーナイフを拝借して、一気に封を切る。

鈍い彼は気付いていないが、書類を取り出す俺の手は、かすかにだが確実に震えていた。

——ついに、この日が来たのだ。

残酷にも思える白い紙に、冷酷な黒い文字の羅列。

一度深く息を吸い込んで、なるべく感情を込めぬよう、早口で読み上げる。

「中央セカイ役所、人事部より。東方セカイ役所、知識部古書保存課、西條彩羽に、中央セカイ役所、知識部知識庫管理課への異動を言い渡す。四方セカイ役所長の許可証を取得の上、三〇日以内に中央セカイへ渡ること。同伴者は、血縁者及び婚姻関係にある者一名限りとする。辞退不可、期日厳守。早急に出立せよ」

顔は俯いたまま、目線だけをちらりと上げると、所長は不満とも困惑ともつかない苦い表情をしていた。俺の心境は、彼よりも遥に苦い。

「栄転だな」

「そのようですね」

この世を成している五つのセカイ——東方、西方、南方、北方、中央——の頂点に立つのが中央セカイであり、その中央セカイを支配しているのが中央セカイ役所だ。いわば、この世の総元締めといったところだろうか。各部門の精鋭たちが集い、彼らの統治の下に暮らす民もまた、一流階級の者が多い。

そういった事情で、役人たちは中央勤務を夢見て働いている。能力を評価されるのは大変名誉なことだが、それ以上に魅力的なものがある。中央を除いた四方セカイの役人でも十分に余裕のある生活が送れるが、中央の役人の給与は、後の三代までは不自由なく暮らせる程と聞く。有り余る財を求めて、四方に勤める者は皆、中央勤務を熱望しているのだ。

「まあ、君の能力は目を見張るものがあるがね、何故この時期外れに異動命令が出るのかね」

何故この私を差し置いて、お前のような若造が中央勤務なのかね。今の所長の言葉を翻訳すると、こうなる。

「私には何とも申し上げられません。欠員でも出たのでしょうか」
所長はなおも勘繰るような目つきで舐めまわしてきた。

賄賂でも使ったのか。

中央の役人夫人にでも取り入ったのか。

そもそも中央にコネがあるのか。

様々な想像が駆け巡ったらしいが、すぐに溜息で夢想を吹き飛ばした。

「……まあいいだろう。向こうでも頑張リたまえよ」

微塵も心のこもっていない励ましのエールを受け、俺も微塵も心を込めずに礼を言った。

「ありがとうございます。お世話になりました」

器用に片眉だけを上げて部下の言葉を流し、抽斗から許可証を数枚取り出して広げる。筆立てから羽ペンを掴み、インクが飛び散る勢いで瓶に突っ込む。追及は諦めたらしいが、俺の中央異動がさぞかしご不満のようだ。

「出立はどうする？ 今日かね、明日かね」

「今日はもう日暮れ時ですし、明日の朝発ちます」

各セカイを渡るのは、役人だけに許された特権であるが、それでも所属役所長の許可は必須だ。いちいち面倒な規則だと毎度思う。羽ペンがガリガリ音を立てて、一枚目の許可証に日付を刻む。

二枚目。これは異動許可証。人事部からの書類に「辞退不可」と記してある以上、許可するしかない。それなのに四方セカイを全部回って許可証を取って来いとは、何とも面倒な話だ。

三枚目。同伴者許可証。

「同伴者はいるのか？ 確か君は独り者だろう。家族もいないと聞いているが」

どこから聞くんだよ。背筋に一瞬寒いものを感じたせいで、作り笑いが引きつった。

「現時点で伴侶はいません。ですが、連れて行きたいと思っている女性ひとがいます。彼女の同意が得られたら、婚姻許可証を下さい。連れて行きます」

「ほう、これから求婚かね。一大事だ」

下卑た笑い。クソオヤジ。

「で、同意は得られそうかね」

「……恐らくは」

多分、彼女は受けてくれるだろう。中央役人の伴侶となれば、絶対安定の生活が待っている。今のうちに、自分を傷つけて働かなくても良くなるのだから。

きつと俺を愛してくれているから、とは言えない。俺自身、彼女を愛しているかと聞かれれば即答はできないからだ。

不足している愛情を、金で補おうとしている自分に吐き気がした。低俗にも程がある。

「では、もう発行してしまおう。私からの餞別だ。特別だぞ」

どうせ後から発行されるものなのに、恩着せがましく言うな。

「相手の名前は？」

彼女の名が許可証に書き込まれてしまうと、もう後戻りはできない。

本当にこれでいいのか？

アイツを巻き込んでしまっていていいのか？

「名前は？」

所長の声が詰め寄ってくる。

彼女の無邪気な笑顔が脳裏を掠める。中央に渡れば、もう二度と会うことはないかもしれない笑顔。

「……金糸雀^{かなりあ}」

迷いもむなしく、俺の罪は確定した。

ごめん、金糸雀。一緒に、いつてくれ。

01「異動辞令」（後書き）

初投稿！ですつ。ちゃんと完結までいきつけるだろうか（笑）
久しくファンタジーを書いてなかったので、慣れない部分もあり
ますがお付き合い頂けたら幸いです！

02「花屋（1）」

役所からの帰り道、ずっと金糸雀のことを考えていた。いや、頭から離れなかったのだ。携えた婚姻届が、紙切れ一枚のはずなのに馬鹿に重たく感じた。

彼女と初めて会ったのは、四年前だった。

役人養成学校を卒業して、今の課に配属が決定した時、先輩連中が歓迎会を開いてくれた。ただ歓迎会に託けて飲みたかっただけだと思ふのだが。その時に使った花屋に、彼女はいた。

客に媚びるでもなく、ただそこに咲く一輪の花のように、微笑みを湛えている姿がひどく印象的だった。

このセカイには、二種類の「花屋」がある。

一つは、植物の花を扱う生花店。

そしてもう一つが、女を売る、いわゆる娼館。

もちろん、金糸雀がいるのは後者の花屋。

彼女のように性を売る女性のことを「花売り」といった。

花売りとなるのは、身寄りのない子供が圧倒的に多い。治安も食糧事情も決して良い方ではない今の御時世、親が何らかの災難に見舞われて身寄りをなくしてしまうことなど珍しくはないのだ。また、食いぶちを減らすために、我が子を手放す親も往々にして存在する。そうした子供を館主が拾ってきて、衣食住を与える代わりに働かせる。衣食住といっても、最低限のものであった。

館主は、元手ゼロで「花」を手に入れ、最低限の維持費で最大限に売りさばく。客がつかない者は、ろくに食事も口にできず、終いには館を追い出される。館を追い出された娘の末路は、言うまでもないだろう。逆にうまく客がつけば、稼ぎ頭として、それはそれは大事にしてもらえるそうだ。極端で単純な仕組みである。

金糸雀は、幸いにしてと言うべきなのか、大事にされている部類の花売りだ。

極上の絹布に似たつややかな髪、人形を思わせる白くしなやかな肢体、名前通りの美しい声。

彼女を求めて足繁く通い詰める男が、一体何十人いるだろう。一般民から役人まで様々な男を虜にしていく様は、ある種異様とも言えた。魅力というより、魔力じみたものを感じる時がある。

俺もその魔力に中てられた一人なわけだが。

ただ、俺が金糸雀を気に入っているのは容姿のせいではない。彼女の、純粹さに魅かれたのだ。

普通、花売り歴が長い程、擦れた感じが出てくるものだが、金糸雀には全くそれがない。良くも悪くも真っ白な状態で、まるで今生まれたばかりの赤ん坊なのだ。

傍にいと自分の汚れが洗われる気がして、少しの間幸福に似た感情を味わうことができた。

あくまで、幸福の紛い物だが。白に黒を消すことはできない。

あれこれ考えている内に、花屋に着いてしまった。

相変わらずの盛況ぶり、女の甲高い笑い声と、男の馬鹿でかい笑い声が見事な不協和音を奏でている。金糸雀と会っている間は気にならないが、館に入る前は、この低俗な空間の中に入っているのかといつも躊躇う。下らない役人のプライドだ。役所にいると、いやでも一般民を見下す癖がついてしまうのだ。

いつもの躊躇いに加えて、今日は婚姻届の件もある。余計に足が重くなった。

明日の朝には、中央に向かって出立しなければならない。迷っている暇など、ない。

軽く頬を叩いて気合いを入れ、慣れた入り口をくぐった。

02「花屋」(1)「(後書き)」

この「花屋」は、さすがに一話分として投稿するには長すぎたので、二部構成です。続きをお楽しみに。

03「花屋(2)」(前書き)

ちょっと長めです。見辛くて申し訳ないです> (() <

03「花屋（2）」

館の中に入ると、不協和音が一層強く押し寄せてくる。酒と煙草と化粧の匂いがごちゃ混ぜになった独特の空気が、肺に絡みつく。ねつとりと重く、これだけはいまだに慣れなくて、つい顔をしかめた。

「これはこれは、西條様」

目敏く俺の姿を見つけて、館主が奥からすり寄ってきた。正確には近寄ってきただけなのだが、商売根性見え見えのいやらしさがそう見える。役人は一般民と比べ物にならない上客なのだから、無理もないことだ。落としていく額が違ふ。

「しばらくお見掛けしなかったので、心配しておりました。金糸雀も寂しがっていましたよ」

「いや、まあ、仕事を立て込んでたもので」

館主に言われて、花屋に来るのも久々だと気付いた。

答え方は曖昧になってしまったが、実際最近是不自然に仕事量が多かった。今思えば、中央異動の前触れだったのかもしれない。

「左様でございますか、お疲れ様でございます。今日も金糸雀を御所望で？」

いかにも殊勝そうに御機嫌を伺う館主の頭に、平手打ちの一つでも喰らわせてやりたい気分になってくる。いちいち芝居がかった行動が、所長とそっくりだ。ついでにハゲかった頭も。

「ああ、空いてるか？」

空いている方が稀なのだが、一応聞いてみた。金糸雀は売れっ子だから、引つ切り無しに客がやってくる。馴染みの薄い客だと、今日は無理だと追い返される者までいるのだ。

「申し訳ございません、今は。もうそろそろお時間ですが、空けさ

せましようか」

花屋は時間制になっていて、大抵一時間単位で料金が定められている。お相手の花売りの稼ぎ具合によって、指名料は異なった。彼女はこの館一番の稼ぎ頭で、当然指名料も最上級だ。役人にとっては痛くもない額だが、一般民には結構キツイ値段になっている。

それを考えると、権力を振りかざして、お楽しみの時間を邪魔するのは気が引けた。

まあ、待ち時間が長い場合は空けさせることも時々ある。少し金を握らせてやれば、ほとんどの連中が退いてくれるものだ。相手も役人であった場合は通用しないので、おとなしく待つか引き上げることにしている。

「少しなら待つよ。その間に、あなたに話がある」

「はあ。私に、でございますか？」

館主はきょとんと目を丸くする。案外、愛嬌のある顔をしていた。所長にもこんな一面があればいいのだ。……いや、前言撤回。脳が想像するのを拒否している。多分、気持ち悪くて仕事にならない。

人払いを、と申し出ると、館主部屋の一角に通された。部屋の中にもう一つ部屋があるような奇妙な造りで、中には椅子が二脚とテーブル一つの簡素な応対セットがあった。

向かい合って腰を掛ける。

「改まって、何のお話ですか？」

愛想の良い笑みの下に警戒心を忍ばせて、館主が言った。

「実は今日、中央行きの辞令が出ましてね」

「ほほう！ おめでとうございます」

「どうも。そこで折り入ってご主人にお願いがあるのですよ」

一応頼み事をする手前、口調が丁寧になった。それがまた、館主の警戒心を煽る。

花売りは、館主に所有権がある。比喻ではなく、この世界で彼女達は「物」として扱われているのだ。自分自身を商品に、金を稼ぐ。誰よりも厳しい状況に置かれている花売りが、誰よりも下等に扱われる。

こついつのを、悲劇、というのだろうか。

ともかく、現時点で金糸雀はこの薄らハゲの所有物であり、俺が彼女を伴侶として迎えるには、コイツの許可が必要だということだ。

「何ですか？」

恐らく、こちらの要求を察知したのだろう。目付きが急に鋭くなった。事前に察してもらえた方が、幾分気が楽だった。

「お察しかとは思いますが、金糸雀を譲って頂きたい」

言いながら、テーブルに手をついて身を乗り出す。ここで下手に出ては、足を掬われてしまう。というか、いまさら引つ込みがつかないのだから、後は押すしかない。

「いくら西條様の頼み事とはいえ、それは……。御存知でしょうが、金糸雀はうちの稼ぎ頭ですし、アレを目当てに通って頂いているお客様も少なくないですからなあ」

案の定、館主は眉根を寄せてやんわりと拒否した。

金糸雀が抜けてしまったら、この花屋の収入は大きく落ち込むだろう。今いる他の花売りに、彼女の代わりを張れるような者はいない。館主が承知しないのも当然だ。

「ええ、わかります。要は、彼女が抜けても補えるだけの額があればよろしいのでしょうか？」

この時俺は、今まで生きてきた中で、ずば抜けて最悪の笑みを浮かべていたに違いない。悪魔というものが存在するならば、きつとこんな顔をしているのだろう。

鞆を手元に引き寄せ、テーブルの上でひっくり返した。ばさばさと乾いた音を立て、札束の山が築かれる。いくつかは、載り切らず

に床へ零れた。

館主は、予想に反して無反応に近かった。狂喜するかと思つていたのだが。

「乱暴なやり方で申し訳ない。明日の朝には中央に発つので、時間がないですよ」

なおも無言を貫く館主の方へ札束を押しやると、彼の口が少しずつ開いていき、ついに顎が外れんばかりに大きく開かれた。どうやら、目の前の大金に驚愕するあまり思考が停止してしまつたらしい。それもそうだろう。一般民がこれほど巨額の金を目にする事などあり得ないのだから。一般民男子の人生を十五回程繰り返して、やっと手に入る位だ。金糸雀の稼ぎぶりが窺える。

「ここへ来る前に、金融部から下してきました。金糸雀が『枯れる』までに稼ぐ金額に引けは取らないはずです」

花売りが仕事場から退くことを「枯れる」という。「花屋」にしる「花売り」にしる隠語を使うあたり、使う側の中途半端な後ろめたさを感じさせる。

花売りの寿命は、平均して二十五歳前後だ。物扱いの彼女達には戸籍というものが存在しないため正確な統計ではないが、大体どの花屋を覗いてみても、それ以上の年齢の者は見当たらなかった。余程若作りがうまいヤツがいれば、別だが。

枯れた花売りの全てが、生命体としての寿命を尽くしたとは言いい切れないが、俺の知る限り命を終えた数の方が多い。病——精神的なものを含む——に倒れたり、客がつかなくなつたりで、館主に捨てられ朽ち果てる。

結局この世界では、親を失つたその日から、惨めな結末を迎えることは避けられないのだ。ただ少し先延ばしになるだけ、更なる苦しみを味わうだけ。花売りの人生とは、そんなものだ。

「失礼致します。かなりあでございます」
控えめなノックの音が、室内に響いた。
はっとして、俺も館主もドアに振り返る。

—— 待て、金系雀。

咄嗟のことで、声にはならない。瞬時に鼓動が速くなる。

金系雀には、俺の汚い一面を見せなくなかった。

自分が金で取引されている所など、誰が見て喜ぶのだろうか。いや、彼女と会う時は金を払っているわけだから、別に今更という感じかもしれない。

これも、使う側の中途半端な後ろめたさなのだろう。実際に現金の受け渡しを目撃されるのは、かなりの抵抗がある。

俺がごちゃごちゃと考えている内に、ドアが開かれてしまった。

最悪だ。

03「花屋(2)」(後書き)

次回はいよいよヒロインの金糸雀が登場ですつ。
そして彩羽のプロポーズ……の予定(笑)

04「花屋(3)」

「待て！ 今大事な話をしているんだ。入ってくるな」

俺の心情を察したわけでもなかるうに、館主は叫んだ。恐らく、
商人スイッチがオンになっていたのだろう。

「も、申し訳ございません。西條様がお待ちと窺ったもので。失礼致しました」

がやがやとうるさい不協和音に消え入りそうな声で、金糸雀は言った。ドアを閉めながらの言葉だったので、後半はほとんど喧騒に飲み込まれた。

恐縮した彼女の声を聞くのは初めてで、新鮮だった。新たな一面を見たという妙な嬉しさと共に、苦しさに襲われる。

俺が知らない場所で、金糸雀はずっとこうしてきたのかもしれない。

「花売り」として蔑まれ、白眼視され、抑圧され、それでもなお、無邪気に笑うふりをしていたのかもしれない。仕事だからか、自己防衛だったかは知れないけれども。

彼女を、救いたい。

俺のこの安っぽい同情心を知ったら、金糸雀は何と言っだろう。

「部屋で待て。西條様は、後からお連れする」

「はい、失礼致します」

ドアの向こうに人の気配が消えると、俺は大きく安堵の息を吐いた。

助かった。

最初で最後のことだろうが、この時ばかりは彼が輝いて見えたも

のだ。……頭のせいでなく。

「さて、お話の続きを致しましょうか」

にんまりと笑い、館主は俺に向き直った。

商人の眼。ぼったくるつもり満々の、いやらしい光が満ち満ちている。

「とりあえず、ここには五〇〇〇用意してあります。まさか、これで足りない？」

一般民男子十五回分だぞ、十五回。

金系雀の稼ぎを考慮して、それに多少色も付けてある。金にこだわる性質ではないが、法外の値段を要求されても気前よく払ってやるほど器は大きくない。稼ぎのレベルが違うといわれる役人連中にとつても、一気に五〇〇〇も出すのは相当の覚悟がいるのだ。

「しかしですな、うちには金系雀の噂を聞いて、遠方からいらつしやるお客様も多いのですよ。金系雀がいなくなったという噂も、また広がるでしょう。そうなってしまうえば、うちとしましても、大変困った事態となるわけでしてなあ」

つまり、見込み客の分も寄こせというわけか。がめつい野郎だ。五〇〇〇で腰を抜かしたくせに。

「ご主人。行き過ぎた欲というのは、身を滅ぼすのですよ。あまり多くを望んではいけません」

せいぜい「神」らしく説教を垂れてやる。

この世界で、役人は神として畏れられていた。一般民とは、あらゆる面で格差がつきすぎているのだ。決して逆らうことはできない、絶対不可侵の存在。

そんな絶対的なカミサマが、女を金で買おうとしているのだから、お笑いな状況だが、遠く遠く神話の時代から神というのは、美男美女が好物なモノである。

館主は依然「はあ」とか言って渋っていた。そんなに金を手に入れたところで、何に使うのか。

コイツが、後代の子孫に財を残してやろうとか、殊勝なことを考えているとも思えない。第一、正式な子供はいないはずだった。店の花売りに手をつけて、孕ませた拳句、捨てたという話は何度が聞いた気がするが。

そろそろ、煮え切らない態度に付き合うのも面倒になってきた。

金系雀も空いたことだし、早々に済ませるとするか。

「それでもなお、あなたが富を望むというのならば、身を以て体験して頂きましょうか？ 強欲が破滅への第一歩だということを、ね」俺は笑ってみせた。別に、声に凄味を効かせたわけでもない。ただ世間話のように、さらっと言ってみただけだ。

しかし、それだけでも館主を震え上がらせるには十分だった。見事に血の気が引いて、口の端が引きつって痙攣し始める。

役人が「神」と呼ばれる所以。一般民が、逆らうことができない事情もここにある。

それは、役人には生まれながらに特殊能力が備わっているからである。能力を持っている者でないと、役所勤めはできないのだ。この能力は九分九厘が遺伝性で、従って役人はほぼ世襲制であった。実際、俺の両親も役人だったし、同じように特殊能力を持っていた。個人によって能力は違うが、いずれもかつては幻想の産物であった「魔法」と呼ばれる代物だ。火や水や風といった自然物を操る力、物や人を操る力、その他にも禁呪とされる種々の力。

大概の役人は一つの能力しかないが、たまに複数の能力を持っている奴もいる。そういう奴はやはり特別扱いされて、ガンガン出世したりする。中央役人にも複数保持者が多いらしい。

一般民を制圧するのに便利な特殊能力だが、だからといって好き勝手に乱発していたのでは秩序が崩壊する。それ故、役所の規則で

能力の使用は制限されている。使用が許可されているのは、自衛の
為か、警備課所属の役人くらいだ。規則を破れば、相応の厳罰が科
せられることになっていた。

「どうします？ これで手を打つか、それとも――」

「じじじじ実力行使ですか？ そんなことをすれば、西條様の御立
場も危ういのでは？ すぐに役所に通報がいきますよ」

まだ抵抗するのか、この薄らハゲ。見上げたタマだな。

「通報がいったとしても、御心配には及びません。お忘れですか？
私は、今や中央セカイの役人です。四方セカイ役所長と同等の権
力があるのですよ」
「これは事実だ。」

セカイ役所の中にも序列はある。四方を統べる中央役所は、たと
え下っ端役人であろうとも、絶大な権力を有している。我ながら大
層な地位に就いたものだ。

「さあ、どうするのですか？」

ここまでくれば、選択の余地などないはずだが。いかに金の亡者
とはいえ、まさか、自分の命を危険に晒してまで、金を要求してく
ることはないだろう。

「……わかりました。どうぞ、お持ち下さい」

ぐったりと首をうなだれて、館主は観念した。

「ご協力頂き、感謝します。では、こちらに署名を」

札束を片付けさせ、役所でもらってきた譲渡証明書を差出し、サ
インをさせる。花売りの所有者が変わったくらいで誰も気には留め
ないのだが、念には念を、だ。

これで、晴れて金系雀は俺の所有物になった。

感慨なのか何なのか、奇妙な感情が胸を浸食していった。

金系雀が婚姻を拒んだ場合でも、戸籍は作ってやるつもりだった。

きちんと、「人」として生きさせてやりたい。今日で五〇〇〇もの貯えを失ったが、それでも、彼女一人を死ぬまで養ってやれる程度は残っている。

——俺はまた、金で解決しようとしてるな。

自分が腐っていく感覚というのは、死にたくなるほど素晴らしいものだ。

「また、ご縁があつたらお会いしましょう」

悪魔の笑みを浮かべて、俺は館主部屋を後にした。

扉を閉める瞬間、館主の笑い声とも泣き声ともつかない呻きが漏れてきた。

どちらにせよ、後味の悪い一時に似合いの終了ベルだった。

04「花屋(3)」(後書き)

結局また男二人のむさい場面となってしまうました(・_・;)
 次回こそ！金糸雀嬢の登場です！

05「金糸雀」

女中に案内され、金糸雀の部屋に入った。わざわざ案内されなくとも、部屋の位置は把握しているのだが。

花売りも稼ぎがそれなりになってくると、個室が与えられるようになっていた。

部屋に焚き込められた、名も知らぬ香が鼻先をかすめる。

薄暗い室内で、金糸雀は髪を梳いていた。灯りに照らされた髪が、艶々と光を弾いている。

手にしている櫛は、いつか俺が贈った物だった。花と鳥が彫りこまれたあの櫛を見た時、彼女に似合いだと思ったのだ。俺が来ることがわかっていたから、わざわざ出してきたのか？

俺を認めると、灯りを背にしてにつこりと笑い、姿勢を正す。先程館主に叱られたことは、引きずっていないようだった。

彼女が軽く頷くと、後ろに控えていた女中は一礼して去って行った。稼ぎ頭の貫禄が、少し垣間見えた。

「久しぶりだね、あやは」

人がいる前では「西條様」、二人きりの時は「あやは」。

俺が望んだことだ。誰かに呼んでもらわないと、自分の名前を忘れてしまいそうで怖かった。

敬語も止めさせた。

畏敬の眼で見られるのが嫌いだし、自分が「人」であることを忘れたくないから。俺は、「神」なんかじゃない。

「ん」

「ふふ、それだけ？」

花屋に来るのはだいぶ慣れたつもりだが、金系雀と二人で会う瞬間はどうしても緊張してしまう。金で彼女を買った後ろめたさのせいかもしれない。いつも、自分が恥ずかしくて俯いていた。

勢い、返事が無愛想気味になる。

俺の上着を受け取るために、金系雀はすつと立ち上がった。空気が揺れ、部屋の物とは違う香りが触れる。

金系雀の、匂い。

久々のそれは、思いの外、身体の奥深く浸透して、静かに熱を孕ませる。使った例^{ためし}はないけれど、麻薬^{ためし}ってこんな感じか。

……こんな馬鹿なことを考える程、俺は彼女を欲していたのだろ
うか。

上着を手渡した後も、俺は立ったままだった。気分がざわついて、腰を下ろす気になれなかったのだ。彼女の衣擦れの音が、神経に爪を立てて落ち着かない。

「あやは、それも預かる？」

「え？」

金系雀の指差す先には、婚姻届が入った封筒があった。慌てて取り落としそうになる。

「いやっ、これは……」

「あ、ごめんなさい。お仕事のものだった？」

「いや、違うけど……」

「じゃあ、なあに、それ？」

「いや、何というか、まあ、個人的なものだから」

「見せて、なあに？ 新しい『本』、持ってきてくれたの？」

子供みたいに純粋な彼女は、好奇心が強い。「なあに、それ？」
が口癖なくらいだ。花屋の外には滅多に出してもらえない生活を考えれば、仕方のないことだと思う。

知識部勤務の俺は、当然ながら無駄に知識が多い。金糸雀にとっては、おもちゃ箱も同然に映っているだろう。

本来は、役人以外に知識を与えることは禁じられているのだが、障りのない程度に話してやっていた。

もちろん、知識の結晶である『本』を渡すことなどもつての外。役所にバレたら、いかに中央役人であろうとも、恐らく首が飛ぶ。さすがにそこまでする勇氣はなく、金糸雀には俺が紙に書き写したものを渡していた。だから、正確に言くと「本」ではなく、ただの紙の束でしかない。

一切の教育を受けていない花売りが文字を読めるはずもないのだが、他のどんな贈り物よりも、その手製の「本」を喜んでいた。

「知識とは、分け与えるためにあるのだ。役人が占有すべきではない」

父さんがよく言っていたものだ。知識部の役人にあるまじき発言だったが、凜とした眼で語る姿がひどく立派に見えて、好きだった。

「いや、そうじゃない」

「あやは、さつきから『いや』ばかり」

いたずらっぽい顔で、くすくす笑う。

その表情が愛おしくて、つい手を伸ばしてしまった。

白いであろ^うう頬に、微かに触れる。

柔らかな温もりが、冷えた指先を溶かしていった。代わりに俺の

冷たさが、彼女を浸食していく。

「冷たい。外は寒いのか？」

小さな二つの掌で、頬に当てられた手をそっと包み込む。今まで、何百人もの男にこうしてきたのだらう。そう思わせる程、ごく自然な動作だった。

「……ああ。少し、冷える」

「どうしたの？ 今日は何だか、変だよ。主様に何か言われたの？」

「いや」

「ほらまた。『いや』って言う」

「……」

自分で自分がおかしくて、口元が綻んだ。

さつさと婚姻のことを切り出して、出立の準備をしなければならぬのに、一向に切り出せない。かといって平静を装うこともできず、この体たらくだ。

天下の役人が、花売りの子娘相手に見抜かれて、馬鹿げてる。

俺が笑っても、金糸雀はつられなかった。さっきまで笑っていたのに、今度は悲しそうな顔をする。くるくる表情が変わるところも気に入ってはいたが、今は胸を締め付けられた。

「あやは、どうしたの？ 何かあったでしょう」

「……」

さて、どこからどう話したら良いものか。

05「金系雀」(後書き)

やっとこさヒロインの金系雀嬢が登場です！

金系雀が彩羽を呼ぶ時に「あやは」なのは、わざとです。おつむが足りてない感じを出したかったので。

06「白黒と、低音のセカイ。」

迷って黙っていると、いきなり金糸雀が動いた。頬に当てていた手をほどき、俺の背に腕を回す。抱かれているこっちが不安になる位、細くて小さい腕。

俺の手から、封筒がはらりと音もなく落ちた。

「金糸雀？」

名前を呼んでやると、回された腕に力が籠った。頭も体も全部、押しつけてくる。抱き締めるといふよりは、しがみつくという方がしっくりきた。

顎をくすぐる髪から、金糸雀の匂いがする。内側に孕んだ熱が、どんどん激しくなる。

抱き返してやって、初めて気が付いた。

金糸雀は、震えていた。

そして、俺は思い出した。彼女の一番嫌いなものを。震えているのは寒さのせいじゃない、恐怖だ。

「どうして、何も言ってくれないの？ 声、聞かせて」

「ごめんな、金糸雀、ごめん。ちゃんと話すから」

「私、聞こえてる？ あやはの声、ちゃんと聞こえてるよね？」

「大丈夫。大丈夫だよ」

金糸雀にとって最大の恐怖は、男に抱かれることでも、迫害されることでも、侮蔑されることでもない。

無音だ。

音が聞こえない、声が聞こえない。その状況が、彼女にとっては耐え難い恐怖だった。

彼女は、生まれつき「高音」が聞こえない。

女の声は、余程どすの利いたものではない限り、聞き取ることはできなかった。部屋の外に響く甲高い花売りの声も、彼女の耳には届いていない。

僅かな聴力までもが、いつか奪われてしまうのではないか。そんな恐怖が、金糸雀の小さな体に、常に重くのしかかっていた。幼い頃、俺も似たような恐怖に襲われたことがある。

俺は、生まれつき「色」が見えない。

認識できるのは、白と黒だけ。今触れている金糸雀の肌が、本当は何色をしているのかもわからないのだ。周りの連中が白いと言っているから、白いのだろうと思っただけで、実は違っているかもしれない。けれど、確かめる術は、俺にはない。

将来、白か黒かもわからなくなつて、何もかも見えなくなつてしまふ日が来るのではないかと、一人震えた過去があつた。

白黒と、低音のセカイ。

俺たちは、互いに欠けたセカイの中で生きている。

金糸雀に魅かれたのは、そんな仲間意識のせいも少しはあるんじゃないかと思う。

06「白黒と、低音のセカイ。」（後書き）

メインタイトルの由来が明かされることと相成りました。

欠けた二人のセカイ。互いに補うことはできませんが、そんな彼らはこの先どんな風に歩んでいくのでしょうか。

07「彼女の魔力」

「——落ち着いたか？」

あれから五分ほど経過しただろうか。黙るとまた不安がるから、その間適当な話をし続けて、息苦しくなってきた。反応のない相手に語りかけるのは、案外体力がいるものだ。

相変わらず金系雀は俺にしがみついていたが、震えはだいぶ治まっていた。

ゆっくりと俺の胸から顔を外し、まっすぐこちらを見つめる。黒目がちの大きな瞳に映りこんだ自分と、目が合う。

——また一段と、あの人に似てきたな。

心の中で、顔をしかめた。

普段、俺は鏡など見ない。自分の中に、あの人——父さん——の影を、見てしまうから。それは、深くはないけれども、薄く血を滲ませるように胸を裂いた。

未練がましく同じ型の眼鏡を掛けたりしてるくせに、何を傷ついた風になってんだ、俺。

「あやは？」

金系雀が、緩み始めていた腕に再び力を込める。

表情には出さないようにしたつもりだったが、無意識に出てしまっていたのか。不安げに潤んだ瞳に、下手くそな愛想笑いの俺が映る。

「大丈夫、何でもないよ」

到底納得していない様子で、金系雀は顎を引いた。よく手入れされた髪が、さらりと落ちかかる。梢を渡る風に似た、澄んだ音色。

俺がその髪に触れるより早く、彼女の小さな掌が、俺の頬を包んだ。滑らかな指先に触れられて、全身に鳥肌が立つ。

振り払うのなど簡単なはずなのに、彼女の射るような眼に引き込まれて、動けなかった。全てを見透かされている気がして、目を逸らしたいのに逸らせない。金糸雀の魔力だ。

「……金糸雀」

名前を呼んでも、呪縛から抜け出せない。

見つめられて、目に穴が開きそうだ。触れられた頬が、熱くて溶けそう。触れている手が、ちりちりと痺れる。どんどん理性が漂白されていく。

「あやは」

「な、に？」

今は、呼ばないでくれ。

堕ちてしまいそうだから。

二度と、手離せなくなってしまう。

「あやは、悲しいの？ 寂しい？」

問われて、理性が切れかかった。

ありつたけの力で、彼女を抱き締める。細い身体が軋み、金糸雀が小さく声を上げたが、構わなかった。頭の中がぐしゃぐしゃで、構っていられなかった。

悲しい？

寂しい？

何が？

反論もできないが、肯定する材料も持ち合わせていなかった。こ

の複雑な感情を、何といえは良いのだろう。

強いていうのならば、今まで生きてきたことが、今生きていることが悲しい。

ずっと前からわかっていたが、俺には何もないのだと思い知らされる毎日が寂しい。

空虚な身体に、古人の知識を詰め込んでできたのが俺だ。書庫に並んでいる本と変わらない、ただ人間の形をしたモノ。幼い頃から役所に飼い慣らされて、自分の意志など、スプーン一杯程度。

——ああ、そうか。俺も金糸雀と同じ、檻の中の身なんだ。

皮肉な名前を付けてくれたね、父さん。

色など知らないのに、「彩」羽だなんて。

飛び立つことなどできないのに、彩「羽」だなんて。

忘れたいのに、忘れたくない。この名前は、俺を締め付ける鎖で、あなたと繋がる細い糸だから。

自分で飛ぶことができないのならば、せめて——。

「金糸雀、俺がお前の『羽』になってやる」

「え………?」

07「彼女の魔力」(後書き)

久々の更新です。

再び動き始めた二人のセカイ、ゆっくりと見守ってやってくださ
い。

08「くるしげに舞う、羽ばたきの――」

「花屋^{こゝ}から飛び立つ為の、『羽』になる」

はつきりと困惑の色が見て取れる瞳を、強く見返した。

「金糸雀には、自由に生きてほしい。自分の好きなようにしていいんだ。もう花売りなんてしなくていい」

「な、何言ってるの？ 本当に、今日は変だよ？ 花屋^{こゝ}から出て行くななんて、許されるはずがないじゃない。主様が認めないわ」

「今の主は、俺だよ」

俺の腕から逃れようとしていた彼女の動きが止まる。

奇妙に口元を歪めたその顔は、これまた初めて見るものだった。

ある種人形めいた彼女にはあまりそぐわない、人間臭い表情。大きい瞳を、更に大きく見開いて、俺を凝視する。

「どういう、こと？」

「館主と話をつけてきた。今の金糸雀の所有権は、俺にあるんだ」

「……待つて……、待つて」

金糸雀が、否定的な反応をするんじゃないかという予想はついてた。

そして、予想に反せず、彼女は必死に首を横に振る。収まっていた涙が、頬を伝い始めていた。追い詰められた感情の発露。小さい頭は、今シヨート寸前なのだろう。

俺の、勝手な偽善心。スプーン一杯程度の、俺の意思。わかっていても、少しは、笑ってくれるんじゃないかって思ってた。笑って「ありがとう」って。

彼女の泣き顔を目の当たりにしたら、俺まで泣きそうになった。馬鹿か。

「よくわからない。私は、あやはみたいに頭良くないの。どうしても急に、こんな……」

「金系雀の意思も聞かずに、勝手に話を進めて悪いと思ってる。でも、ごめん、時間がないんだ。明日、俺は東方を出る。多分、戻ってこない」

伏せていた顔を、ガバツと上げる。頬に張り付いた髪が、彼女の美貌を悲壮感で彩っていた。

髪と一緒に、涙を払ってやる。そんなことしたって、彼女が笑ってくれるわけでもないのに。自分の涙を、拭えるわけでもないのに。

「今日、中央セカイへの異動辞令が来た」

金系雀はきよんとして、俺を見る。

そうか、「異動辞令」がわからないのか。いつもの金系雀なら、「なあにそれ」って聞くんだろ。さすがにこの状況下では、その口癖を聞くことはできなかった。

「中央セカイで働け、っていう命令が来たんだ。だから、行かなくちゃならない。明日の朝には、発つよ」

「戻って、こないの？」

「きつと、そうなると思う」

「もう、会えないの？」

突然、背中に痛みが走る。金系雀の爪が食い込んでいるのだと気付くのに、多少の時間が必要だった。何が起きたのがわからないほど、鋭く強い痛み。あの細い腕のどこにこんな力があるんだ？

「金系雀ッ……」

「かなりあを、どうするの？」

「は？」

「主様からかなりあを買って、どうするの？ あやはも、かなりあを売るのは？ 花売りじゃないなら、何をさせるの？ 今度は何を売ればいいの？」

問いを重ねるごとに、痛みが激しくなる。呪詛のように這う声に、喉元を締め上げられた。

「ちが、う。かな、りあ……ッ！」

「それとも、捨てるの？ 姐さんたちみたいに、かなりあを捨てるの？ 主様に頼まれたの？ 中央に行くついでに、捨てて来いって？ ねえ、あやは」

痛みと苦しみの中、辛うじて見えた彼女の顔には、うっとりとした笑みが浮かんでいた。恍惚とした笑みの傍らには、透き通った涙。金糸雀は、俺なんかよりもっと前に、堕ちていたのかもしれない。それを隠すのが、異様に上手いだけで。

「愛」を信じきれない、愚かで哀れな籠の鳥。

ああ、本当に、俺たちはよく似ている。
髪を撫で、濡れた頬に口付けた。

——二人で一緒に、堕ちようか。

08「くるしげに舞う、羽ばたきの——」（後書き）

やっと中央行きを告げた彩羽。ここに来るまでに8話も……orz
金系雀嬢がかなりダークです（汗）最初は明るい場面にしようと
思ってたのになあ。

闇は、誰の心にもあるモノ。それは、ほんの少し触れるだけで、
簡単に増殖してしまうのですね。

09「産声の響く夜」

痛みが、徐々に鈍いものになっっていく。背中が熱い。心臓が脈打つ度、傷が疼いた。

痕は、残るだろうか。

「俺は、金糸雀かなりあを売る気も、捨てるつもりもない。欲しいから、手に入れたんだ。離れたくないから、迎えに来たんだ。……一緒に、いこう?」

ようやく、伝えなかった言葉を吐き出す。

金糸雀を抱く腕は、みつともない位に震えていた。

痛みなのか、緊張なのか、恐怖なのか、それとも、待ち構える未来か。

見えざる力が、俺を震わせていた。

「……してる?」

金糸雀が、俺の腕と同じ位震えた声で呟く。それはあまりにも小さく、聞き取ることができなかった。

身を屈めて、彼女の口元に耳を寄せる。彼女もまた、俺の耳に口を寄せた。

柔らかな吐息が、くすぐったい。

「かなりあを、愛してる?」

そう問う声は、ひどく疲れているように聞こえた。

震えのせいかもしれない、涙のせいかもしれない。
恐らく、違うけれど。

金糸雀は、いや、「かなりあ」は、本当に疲れたのだろう。幾度も繰り返してきたその問いに、その問いを繰り返す自分に。

信じられないくせに、求めるからだよ。

知らないくせに、知ったふりするからだよ。

当てもないのに探し回るから、草臥れるんだ、かなりあ。

馬鹿だなあ、お前は。

「ねえ、あやは？」

背から顔、顔から首へと、冷たい掌が愛おしそうに撫でてゆく。
小さな手に、体温も、鼓動すらも吸い取られそうだった。

「愛してる？」

答えられるはずがなかった。

もし仮に、ここで俺が肯定した所で、かなりあを更に疲れさせるだけだ。

愛情を望んでいるのに、受け入れることはできない。

この無為で憐れな営みを、俺は断ち切ることができるだろうか。

できる限り優しく、小さな手を包む。

「わからないよ」

「……？」

彼女は、俺にどんな答えを期待したのだろう。

予想外の答えに戸惑うように、彼女は首を傾げた。

丸きり少女の仕種だが、内に抱えるモノは、どす黒く重たい。ともすれば、闇に同化してしまいそうな程。

「かなりあ、愛ってなあに？」

普段の金糸雀を真似て、尋ねてみた。

そこに答えがあるかのように、俺の眼の中を凝視する。

そんな所には、何もないよ。俺だって、愛なんか知らないのだから。

多分失敗した笑みを浮かべて、肩を竦めてみせる。

「わからないだろ？ 俺も知らないんだ」
「えっ？」

かなりあの目の色が変わる。恐らく、「金糸雀」に入れ替わったのだろう。

どこか嬉しそうで、好奇心に充ち溢れた瞳は、間違いなく彼女のものだ。

金糸雀に気付かれぬよう、細く安堵の溜息を吐く。

「あやはにも、知らないことがあるの？」

「たくさんあるよ。俺が持っているのは、本の中の知識だけ」

書物は知識の結晶、人類の至宝。

そう思っ生きてきたが、いつの間にか、信じることができなくなっていた。

知らないことが多すぎる。

わからないことが多すぎる。

身に降りかかる不幸は、俺の中の知識では対応しきれないものばかりだった。

頭が破裂しそうな程詰め込まれているくせに、肝心の時には何の役にも立たない。

それでも、捨てることはできないのだ。知識を捨てれば、俺には何も残らない。

「愛は、本には書いてないの？」

「書いてあるには、書いてある。でも、人の感情は複雑すぎて、文字では語れないものだから」

「ふうん、難しいのね」

「うん、そうだな」

「あやはにわからないのだったら、私にわかるわけがないね」

寂しそうに微笑む。諦めの、笑顔。

ほら、わからない。何で、諦めるんだよ。何で、そうやって卑下するんだよ。

何で、俺たちは、辛いのに笑ってしまうんだろう。

「一緒に、答えを探しに行かないか」

「？」

「俺と一緒に、中央へ行こう。たくさんモノを見て、たくさんの人と話して、そこから答えが得られるかもしれない。愛が何なのか、わかるかも」

説得力ゼロの推測論。でも、縋ってみたくなる。

理論尽くめの知識部役人に、あるまじき行為だが。

「四方セカイを回るから、南方も、西方も、北方も行くよ。この世

界の全てを見られる旅」

「……世界って、広いのよね」

「すごく、広い。多分、金糸雀が想像してるよりも、ずっと」

ほとんど花屋から出ることのない花売りに、世界の大きさが想像付くとも思えなかった。

もっとも、三〇日間で回れる世界が大きいのかどうかは、よく知らないが。

再び背中に灼熱感が走った。意識してのことか否か、彼女が傷を撫でる。

「あつたかい」

胸に埋められた顔も、背に回された手も、微かに触れる脚も、震えていた。

「寒い？」

「怖い」

「……何が？」

「世界は私を、小さな、汚れた、弱い花を、受け入れてくれるかな。飲み込まれて、消されてしまわないかな。あやはの暖かさもわからなくなったら、どうしよう」

「金糸雀」

「神様は、世界は、私を許さないかもしれない。汚れてるのに、自由だとか愛を求めて、なんて身の程知らず……」

違う、金糸雀は汚れてなんかいない。

神が、人が、世界が、汚したんだ。

金糸雀にここまで言わせて、世界は彼女に何を望んでいるのか。

「大丈夫、守るから。俺も自由に生きることが許されてないけど、金糸雀は守るよ。相手が誰でも、何でも、金糸雀を傷付ける全てのモノから守ってみせる。役人の能力は、ちから人を守る為にあるんだよ」

「ありがとう、あやは。でも、私は、『人』じゃないの」

嗤った気がした。

伏せられた顔は見えなかったけれど、彼女は嗤っていた。物である己を、蔑んで嗤った。

「明日になったら、『人』になれる。戸籍を作りに行こう」

これで、彼女の悲しみの一つは消してやれるだろう。

今までの人生で二回目位のことだったか、役人であることに感謝した。感謝する相手も、知らないけれど。

「嘘……」

「本当。花売りから解放されるし、もう消耗品扱いされることはない。金系雀といられて、俺は幸せな気持ちになれた。だから、お返し。幸せになってくれたら、嬉しい」

よくもまあ、と自分でも思う。

嘘は吐いていないが、全てを明かしたわけでもない。都合の良い部分だけ、掻い摘んで話をしている。

やっぱり俺は、腐ってるんだ。

「ああ……」

金系雀は手で顔を覆い、床に崩れた。長い髪が、彼女を守るように包んだ。

「本当に、解放されるの？ 花屋（はなや）から出られるの？ 『人』になれるの？」

「うん、全部本当だ。夢じゃない」

彼女は、声を上げて泣いた。生まれたばかりの、赤子みたいに。

もしかしたら、そうなのかもしれない。

この日、この瞬間、生まれ変わったのかもしれない。

「ありがとう、ありがとう、あやは」

ひとしきり泣き終えるまで、
嗚咽混じりに、ずっとそう言っ
てい
た。

09「産声の響く夜」（後書き）

約一か月ぶりの更新です（・|・:）お待たせいたしました（？）

「金糸雀」と「かなりあ」、二重人格発覚です。ええ、まったくもって予定外ですよ（汗）

彩羽の隠し事は追々明かされていきますので、お楽しみに。

本日は、もう一話更新します。そちらも、お楽しみに。今までとは違う作風になってしまっていますが、はてさて……（^| ^:）

10「月下美人と手駒」

「戸籍の件とは別で、中央へ行くかどうかは、金糸雀かなりあに任せる。それなりに危険が伴うし、大変な思いもきつとするだろう。強制はない。」

このまま東方に残って暮らしていくのなら、それでも構わない。明日の朝迎えに来るから、決めておいて」

彼女の返事も待たずに帰ろうとすると、慌てた声が追い掛けてきた。

「待つて、あやは。封筒忘れてる」

しまった、そうだ！

本気で焦って、金糸雀の手からそれをひったくった。

「そんなに、大事なもののなの？」

興味津々で、封筒を見詰める。

自分の将来を決めてしまっ、大事な書類だとも知らずに。

心臓が、ゆっくりと跳躍を始める。思考能力が、段々漂白されていく感覚。

まずい。

何で言い忘れてたんだ？

っていうか「一緒に行こう」って、考えてみれば求婚みたいなもんじゃないか。

この上、まだ「結婚しよう」とか言わなきゃいけないのか？

こんなに一気に色々言ったら、金系雀の頭パンクするだろ。

そうだよ。まだ一緒に行くって決めたわけじゃないし、明日でも良いよな。

いや、一緒に行くってなっても、俺との結婚が条件だったら辞めるとか言い出すかもしれない。

それって、相当キツイ状況だろ。惨め度最大だよ。

そもそも、金系雀は俺のことどう思ってた？

「愛してる？」とか聞いとして、自分はどうなんだっつー話ですよ。

嫌われてはないだろうけど、客としてかもしれないし。良いように使われてるだけかも。

俺だって彼女を利用しようとしてるんだから、そこは同罪だろ。

あああもつめんどくせえ！

一人脳内会話を終了させて、金糸雀に向き直る。

「大事なものだよ」

「それ、なあに？」

「……婚姻届。俺と、金糸雀の」

「え？」

金糸雀は、今日何回「え？」と言ったのだろう。その本気のキョトン顔が、胸に痛い。

「ごめん。言い忘れていたんだけど、連れていけるのは、血縁者が配偶者一人なんだよ。だから、その、金糸雀が東方から出るには、俺と結婚することが条件なんだ。隠してたわけじゃなくて、本当に言い忘れただけで、他意はない。ごめん」

言葉を重ねれば重ねる程、墓穴が深くなっていく。最強にダサイ。

背中傷よりも、今は顔の方が熱かった。

「私、あやはのお嫁さんになるの？」

お嫁さん。

子供じみた単語が、余計に恥ずかしかった。

「なるかどうかは、金糸雀次第だよ。ただ、中央へ行くなら、結婚しなくちゃいけない」

「あやはは、どう思うの？」

「えっ」

「一緒に行こうって言うてくれたのは、お嫁さんになってほしいってこと？」

頼むから、真顔でそんなこと聞いてくるなよ。普通に分析するなよ。

何かもう、恥ずかしすぎて涙が出てきそうだった。

「そうだね、わかってるなら聞き直さないでくれよ。すごく恥ずかしいんだ、こういうの。柄じゃない」

「でも、確認しなきゃわからないでしょ？ 相手の気持ちを確認しないのは良くないことだって、前にあやはが言ってたのよ」

いつだかわからんが、その時の俺を殴ってやりたい。

「わかった、うん、そうだな。ちゃんと说不ない俺が悪かった。

……金糸雀といると楽しいし、嬉しいよ。守ってやりたいって思う。

幸せになつてほしいって思う。
……これで良いか」

額から流れる変な汗と、羞恥のあまり俯いていたせいで、眼鏡がズルズル下がってくる。

叶うのならば、今すぐここから逃げ出したい。

俺の願いとは裏腹に、金糸雀の追及は止まなかった。

「ということは、つまり？」

俺、良いように誘導されてないか？　もしかして、遊ばれてる？

ちらりと窺うと、金糸雀はニンマリとした意地の悪い笑い方をした。

しまった、そうだ。

彼女は、一夜の愛を売る、花屋の稼ぎ頭。

色恋沙汰で、敵うはずがないのだ。

「傍にいてほしい。俺は、金糸雀と結婚したい」

目を瞑って、半分やけくそで言った。
理想の求婚像とかは持ち合わせていなかったが、コレはない。ひどすぎる。

恐る恐る目を開けると、望んでいたものが、そこにあった。

少しはにかんだ、満面の笑み。

「金糸雀……？」

「ありがとう、あやは」

舞うように軽やかに俺の手を取り、握り締めた。

「どこへなりとも付いて参ります。私の、旦那様」

そう金糸雀の声が聞こえて、次に意識が戻った時、俺は床に座っていた。状況から察するに、腰が抜けたのだろう。本当に、ひどすぎる。

呆然とする俺の頭を、「よくできました」と言わんばかりに撫でられる。

完全に手駒だ。

彼女がクスクス笑うのが悔しくて、腕を掴んで引っ張ってやった。非力な金糸雀が抗えるはずもなく、簡単に倒れてしまう。

ちょうど良いので、そのまま抱き締めた。

いつもより、もっともっと、何百倍も愛しく感じた。

金糸雀も同じなのか、強く抱きついてくる。

今度は頬ではなく、唇に口付けた。

「初めてだね、あやはが口にするの」

また意地の悪い笑い方をする。

何でそう、言わなくて良いことを口にするのか。

「悪かったな、今まで腰抜けで」

「今も、腰抜けてるけど？」

「金糸雀！」

「ふふっ」

他の花売りと館主に挨拶を済ませ、俺たちは連れ立って花屋を後にした。

繋いだ手をぶんぶん振って、彼女は至極御機嫌のようだった。
泣いたり笑ったりはしゃいだり、忙しいな。

「ねえ、あやは。こういうのは愛とは違うの？」

「さあ、どうかな？ 金糸雀が本心で俺をどう思ってるか、わからないし」

さっきの仕返しのもりで、意地の悪いことを言ってみた。

金糸雀は、月明かりの下、余裕の笑みを見せる。

月下美人。

そんな名前の花を、思い出した。夏の夜に、数時間だけ凜として
咲き誇る花。

今の彼女の姿に、少し似ている。

「そうね、もっと上手くなってほしいかな」

敢えて「何を」上手くなってほしいのかは言わなかった。
それが余計に男のプライドを直球で決る。

「……売り飛ばすぞ」

「できないくせに」

彼女は、一夜の愛を売る、花屋の稼ぎ頭。

色恋沙汰で、敵うはずが、ない。

10「月下美人と手駒」(後書き)

話数がようやく二桁突入です。

更新も遅ければ、話の進行速度も遅く、申し訳ないです(;' ;)

今回はちょっと毛色の違う雰囲気となりました。新作の影響が否か……。

少しは「ほのぼの」が出せたかな、と思います。

甘々なのは書いてて恥ずかしいです。彩羽じゃないですが、こついうの柄じゃないっ(< > ;)

さあ、いよいよ旅立ちの時です。乞うご期待！

11「始まりのセカイ」

翌朝、少ない荷物を鞆に詰め、俺と金糸雀かなりあは役所へ向かった。
二つの書類を携えて。

一枚目。戸籍作成申請用紙。

正体不明の不審人物でも、役人の申請であれば戸籍を得る事ができた。

当然ながら、その人物と申請を行った役人は一蓮托生の運命にある。何かしでかせば、無条件にもう片方も締め上げられるってわけだ。この制度を悪用されて、消されたヤツも中にはいる。恩を仇で返されたヤツも、また然り。

どこのセカイでも、正直者の善人が損を見るようにできていた。住みにくい世の中だ。

俺も、金糸雀が何かやらかしたら糾弾されることだろう。悲しい事だが、喜々として群がってくる輩が大勢想像できた。

そうならない為にも、しっかり手綱を握っていなければ。

すでに金糸雀は街の様子に興味津津で、手を離したら確実に迷子になる。俺にとっては何の変わりもない眺めだが、彼女にとっては見るものの全てが新鮮なのだ。

できることならば自由に見物させてやりたいが、タイムリミット付きの旅ではそうもいかない。

フラフラと落ち着かない金糸雀を引っ張って、役所へと急いだ。

二枚目。婚姻届。

正面の階段を一段昇る度、心拍数が跳ね上がる。
この先へ続くのは、天国か地獄か。

一蓮托生。

金糸雀の手を強く握り締める。

「あやは？」

——今なら、まだ戻れる……まだ……。

今の今になっても、迷っていた。赤の他人を自分の人生に巻き込むことへの、恐怖。

どこかですっと声がする。

お前が、幸せになれるはずがないだろう。

何故なら、お前は——。

俺の中の、誰かの声。

この先は、いつも聞こえなかった。心が聞くことを拒否して、身体がそれを叶えた。

聞かずとも、わかっている。知っている。

俺は一体、どうすれば？

「あやはっ！」

強く引つ張られた腕の先に、頬を膨らませた金糸雀がいる。夜の妖艶な姿からは想像できない、少女の仕種。

何かおかしくて、思わず吹き出してしまった。そんな俺を見て、彼女はますます頬を膨らませる。

「何がおかしいの？」

「何だろ……あはは！」

晴れた空の下、声をあげて笑うなど、何時振りだろうか。記憶にない位、遠い過去だということはわかった。不思議と、悲しくはない。

今、多分、これが「シアワセ」なのだと思えるから。

「変なの」

へそを曲げて、プイツと外方を向く。揺れる髪から漂う金糸雀の匂いは、陽を浴びてまた違った風に鼻をくすぐる。春に咲く花のような、澄んだ優しい香り。

そういえば、この東方にも、そろそろ春が来る。

風は依然として冬の寒さを感じさせたが、その中に微かな春の気配が忍んでいる気がした。陽射しも暖かく、穏やかだった。

「金糸雀」

「？」

最終確認。

「俺と来ることに、異存はない？ この先は、何も保障できないよ。もちろん、全力で守る。でも、及ばないことだってあるから」

「いぞん、ってなあに？ およばない、って？」

いちいち時間の掛かる会話。

普段だったら苛つくだろうに、今はこの時間が愛おしかった。

「『異存』は、違っつていう気持ち。『及ばない』は、できないって事」

多少の語弊はあるが、彼女のわかりやすいように言い換えてやる。

これから夫婦になる予定だというのに、親子のようだ。また笑いが込み上げてくる。

金系雀は、一度チラリと空を見て、レンズ越しに俺の眼を見た。

「気持ちは変わらないし、あやはにできないことはないよ」

彼女なりの精一杯。何故か、そう感じた。

俺にわからないだけで、金系雀は色々な事を考えているのかもしれない。小さな頭で、たくさん、たくさん。

真っ直ぐに見詰めてくる瞳には、確かな決意の色があった。

ならば、俺も腹を括らなければいけない。

「わかった。じゃあ、行こう」

今はまだ少し重い、俺への絶対的な信頼。

変わらず暖かい、握り返す小さな手。

望むことなく備わっていた、この能力^{ちから}。

恨んだこともある。できるなら捨ててしまいたかった。

呪われた能力と命を使って、俺は、君を守ろう。

俺と金糸雀、二人分の決意が込められた薄っぺらい紙は、滞ることなく受理された。

行く先には、固く閉ざされた門がある。

東方セカイと、外を繋ぐ唯一の出入り口。くぐってしまえば、もう二度と戻ってくることはないだろう。

住み慣れたセカイ。最後に振り返ると、金糸雀も倣って反転する。

彼女にとって、俺にとって、このセカイはどんなだったろうか。

始まりの場所。俺達が出逢い、旅立っていく、戻れない起点。

軽く頭を下げて、広がるセカイに別れを告げた。

「行こうか」

頷き、寄り添う小さな身体。

何が待つのかもわからない旅路の果て、辿り着く終点まで、繋がれた手を離さずにいられるか。

「大丈夫だよ」

見透かした風に、彼女は微笑んだ。

この時、白黒の俺のセカイに、一瞬だけ、色が灯った気がしたんだ。

11「始まりのセカイ」（後書き）

久々更新（<―>）

いつまでたっても東方から出ない二人（笑）11話使つてようやく旅立ちですよ。スローペースにも程がありますね、すみません（ノ
―;）

彩羽の言う「呪われた能力と命」。

明かされるのは最終段階に入ってからになりそうですが、ちょこちょこ欠片を潜ませていきたいと思います。

乞うご期待（*^^）v

12「目指す、その先に」

門の横に設営された、門番の詰め所。ここで通行許可証などの各種書類の点検や、本人確認が行われる。毎度のことだが、結構時間も掛かるし、面倒な工程だ。

許可されたモノ以外は、蟻一匹通さない。そう言わしめるほどの厳戒態勢。外からはわからないが、詰所には腕利きの警備部の役人が不要なまでに駐在している。一般市民如きが、彼らの眼を盗んで門を突破することはまずもって有り得ない。過去にも、そのような事件は一件たりとも起きていなかった。

逃げようと試みる者なら、後を絶たない。限られたセカイで一生を過ごしていく閉塞感に嫌気が差し、新天地を求めるのだ。

しかし、前述通りその全員が未遂に終わっている。そして、例外なく処刑されていった。

万が一にも外に出た所で、生きながらえる術はないのだが……。一般民には、門の外の危険性すら知らされておらず、役人が全ての情報を占有しているのが現状だった。

「失礼します」

金系雀を伴って詰所へ入ると、受付に座っていた若い所員がにこやかな笑みで迎えてくれた。無表情な役人が多い中、珍しいことだ。

「おはようございます。こちらに、ご本人とお連れの方の名前の記入をお願いします」

確認作業その一、筆跡照合。

カウンターのの上に置かれた書類に、ペンを走らせる。自分の分を書き終え、金系雀の欄に来た所で動きが鈍ってしまう。

続柄……「妻」。

この一文字を書き終えるまで、どれだけの労力を尽くしたことが目の前の青年に、明かに不審な目を向けられた。まずいな、審査が長引く。

残りの箇所を手早く書き終え、精々涼しい顔を装って提出した。

「それでは、各種許可証を提示して下さい。奥様の身分証明書もお願いします」

「奥様！　ねえ、あやは、奥様だつて！　私、奥様？」

黙って大人しくしていたかと思えば、コレだ。場所をわきまえないにも程があるテンションではしゃぐ。

「そうだよ、結婚したんだから金系雀は奥様。いいから、静かにしてなさい。ここは、静かにしてないといけない場所なの」

注意されると、ムツと口を尖らせて恨めしげな顔をする。後ろから、数人分の忍び笑いが聞こえてきた。赤くなる俺を余所に、金系雀は外方を向いて景色を切り取った窓に張り付く。

窓からは、東方セカイの「向こう側」が見えた。見た目だけは美

しい、一面の花畑。その美しさの裏側に何があるのかも知らず、一般民は愚かに外のセカイを求める。

彼女もまた、その一人なのか。

切なさや嘲りが混ざった気持ち悪い心を振り切って、手続きに戻った。

「はい、これで書類は結構です」

ちょっとした厚さの書類を束ねて、青年所員は笑顔をくれた。最初は爽やかに見えたこの笑みも、何だか嘘臭さが滲み始めている。面倒な手続きで、心がささくれたのかもしれない。

「では、次は能力照合に参ります。審査官をお呼びしますので、少々お待ち下さい」

そう言って、カウンターの奥へ消えていった。

書類審査は、第一段階。限りなく不可能に近いが、まあ偽造できなくもない。不正出門を防ぐ為には、もう一つ絶対的な本人確認が欲しいのだ。

それが、能力照合。生まれ持った能力は似たり寄ったりでも、指紋のように、誰一人として同じ者はいない。いわば「気」みたいなモノか。「気」を読み取り、照合することで、各個人を特定する。役人の中でも、能力感知に優れた者達がその任を負っていた。

「よう、西條！」

青年所員が消えた扉から、別の男が現れた。俺と同じ年恰好の、
というか同期の所員。味方よりも敵の方が多い俺の、数少ない役所
内の理解者だった。

人懐っこい笑顔で、手を振ってくる。軽く手を上げて、彼に応え
た。

「そうか、ここの所属だったな。久し振り、せき関」

「おう。……聞いたぜ、中央勤務だったな」

先程とは打って違って、至極複雑な顔で言う。

——ああ、やっぱりコイツはわかってくれてるんだな。

思わず、口元が綻んでしまう。

「何だ、栄転だぞ？ 祝ってくれないのか」

「お前がそうして欲しいんなら、そうするけど」

「そういうことにしておいてくれ。……でないと、逃げそうだから
さ」

思わず、弱音が口を吐いて出る。今更嚙んでも無意味だが、咄嗟
に手で塞いでしまう。

関は一瞬泣きそうな顔になり、次いで元のように微笑んだ。

「じゃあ、おめでとう。長年の願いが、叶ったな」

真っ直ぐに差し出された彼の手を、控えめに握り返す。まだ、前だけを見て歩くことはできなかった。

確かに、長年の願いではある。しかし、できれば叶わない方が良かったのではないかという思いも、どこかで存在している。

躊躇いがちな俺の掌を、関は強く握ってくれた。懐かしい友の感触に、肩の力が少し抜ける。何とか、笑い返すことができた。

「——ありがとう」

「あ、もう一つ『おめでとう』だな」

「ん？」

関の視線は、俺越しに何か別のモノを捕えていた。

振り返ると、そこには依然外を眺める金系雀がいた。ああもう、窓に触ったら指紋が付いて汚れるだろ。

「あの子、あの『金系雀』だろ？　すげえな」

彼女が花畑に見入るのと同じ表情で、彼は金系雀に見入った。

花売りの「金系雀」は、東方セカイで知らぬ者はいない。特に、男であるならば。

「そう、あの『金糸雀』だよ。俺も、正直実感が薄い」

「陽の下で見ると、また違った感じで良いなあ」

「他人の妻見て鼻の下伸ばすな^{オンナ}」

「へえ、西條の口からそんな言葉が出るなんて。色男は違うね」

関は、ニヤニヤと意地の悪い笑みを見せる。自分の放った言葉の恥ずかしさに、頬が紅潮するのを感じた。確かに、何か俺らしくない。

「馬鹿言つてないで、仕事しろよ。ほら」

照れ隠しにそう言って、彼に向かって右手を突き出す。忍び笑いを漏らしながら、関は俺の手を取った。慣れていない分、こういうやり取りは調子が狂う。悪い気はしないのだが。

関が集中を高める為に目を閉じると、俺もそれに倣って瞼を閉じた。繋がれた手を通して、彼に「気」を送り込む。今回は審査官が知り合いだったからまだ良いが、見ず知らずのオッサンと手と手を重ねるのは結構な忍耐を強いられる。この方法は改善の余地が大いにあると思っているのは、俺だけではないはずだ。

「……照合完了。東方セカイ役所、知識部、古書保存課所属、西條彩羽であることを認証しました」

ものの三十秒程だろうか。閉じていた目を開くと、関は受付を振

り返って青年所員に告げた。青年は頷いて返し、手続き書類にペンを走らせる。

「以上で、出門手続きを終了致します」

俺と、いつの間にか隣に立っていた金系雀を交互に見て、関は言う。金系雀が不審な眼差しを向けているのは、彼が繋いだまま離さない手だった。

何となくだが、意図がわかる気がする。

——行くな。

微かに力の込められた手が、憂いを帯びた瞳が、訴えていた。行きつく先が、決して明るい未来ではないことを肌で感じたのだろう。敏感なヤツ。

「……何とかなるよ」

ふと、口を吐いて出た。これまた俺らしくない台詞に、関は驚いた顔をする。

「どうなるかわからないし、どうしたいのかもわからないけど、もしかしたら……全部上手くいくかもしれんぜ？　こんな具合に」

運よく手にすることができた「妻」を横目に、笑ってみせた。当の本人はきょとんとしているが、関は安心したように微笑んだ。

「変わったんだな、西條。以前のお前は、絶対そんな事言わなかったよ。金系雀のおかげか？」

「だろうな」

「そっか。……送るよ」

彼は手を離し、門の外へと俺達を導く。

一步一步、花畑が近付いて来る。俺には見ることはできないが、きつと色鮮やかな光景なのだろう。

死後のセカイである「天国」も、花が咲き乱れ、それは美しい場所だという。ただし、そこへ行けるのは「善」の人間だけ。この命が尽きた後も、俺は見る事が叶わない。手が届く距離にあるのに、手に入れることはできない。本当に、呪われた人生だ。

自嘲の笑みを漏らしながら、奇跡的に手に入れられた「花」を握り締める。

「離すなよ」

俺の肩をポンポンと叩き、耳元で囁く。言われなくても、わかってるよ。

「我が友の行く先に、幸多からんことを」

差し出された「お守り」と言葉を携えて、詰所を後にした。

陽の光は暖かく、吹き抜ける風は優しい。

「負けんなよっ！」

背中に響く関の声に、振り返らずに応えた。雲ひとつない空に向かい、拳を突き上げる。

さあ、鬼が出るか、蛇が出るか。

今、旅立ちの時――。

12「目指す、その先に」（後書き）

二か月ぶりの投稿でございます（＾―＾；）
少しずつ仕事にも慣れ、余裕というほどではないですが、それらしきものも見えてきました。

久々の彩羽と金系雀、いかがでしたか？

今回は関との絡みが多くて、あまり金系雀の出番がありませんでした……（-”-）

次回から、二人の旅が始まって参ります。

少しずつ彩羽の秘密や、このセカイの仕組みなんかも明らかになってきますので、乞うご期待ですっ！

こちらでも、彩羽と金系雀のお話が楽しんで頂けます♪

彩人さまとのコンビ「Dear」↓<http://mypage.syosetu.com/72310/>

「ノスタルジア管理局」とのコラボ作品「白黒ノスタルジア」、毎月25日更新です（*^^）v

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5871i/>

白黒と低音のセカイ

2010年10月10日12時05分発行